

コラム

公共空間の音環境のあり方を考える

いわみや しんいちろう
岩宮 眞一郎

九州大学名誉教授 / 日本大学大学院 芸術学研究所 非常勤講師

1 公共空間では様々な音が聞こえてくる

私たちは、近所の公園、最寄りの駅、図書館、体育館など、様々な公共空間を利用している。このような公共空間は、そこを目的に訪れる人だけではなくたまたま通りかかった人など、多様な人々が行き交う空間となっている。行き交う人の中には、若い人もいれば高齢者もいる。また、外国人や何らかの障害を持った人たちもいる。

快適な環境を提供するためには、公共空間においても良好なデザインが必要とされる。もちろん公共空間の特性に応じて、そのニーズは様々であり、そのニーズに応じた様々なデザイン活動が行われている。公共空間のデザインによって、空間的要素や見た目に配慮しつつ、機能的で心地よい空間を構成している例も多い。

ただし、公共空間における音の環境にまで配慮した空間ということになると、それほど多くはない。公共空間には様々な音が存在する。人々が往来する空間であるから、喋り声や笑い声、ときには怒鳴り合う音も聞こえてくる。多くの人が集まる場所では様々な足音も聞こえる。自動車の行き交う音や電車の走行音が聞こえることもあるだろう。店舗からは販売促進を目的とした音楽が鳴り響いていることも多い。

2 日本の公共空間にはアナウンスやサイン音が多い

公共空間ではさらに様々なアナウンスやサイン音も鳴り響いている。とりわけ、日本の公共空間で

はその傾向が顕著である。アナウンスやサイン音を鳴らす目的は様々であるが、その多くは安全安心のためのものである。それらの音は日本人特有のきめ細かいサービス精神に基づいて提供されている。

アナウンスの中には、「安心して下さい。きちんと対策をとっていますから」とのエクスキューズになっているものが多い。公共空間においては、何らかの事故が起こったり、迷惑行為があったりすると、それを注意するアナウンスが流されるようになる。携帯電話が広がり始めた頃から、電車やバスの車内では「携帯電話のご使用はお控え下さい」とのアナウンスが流れるようになった。また、新型コロナウイルスの感染症の患者増加により、3回目の緊急事態宣言が出された頃には、「路上で飲酒しないように」との呼びかけもあった。アナウンスを出す側は、アナウンスをすることによって、「ちゃんと対策をした」ことにし、受け取る側もそれを「よし」とする。音を出す側と受け取る側が、アナウンスの存在を前提とした社会を作り上げた結果、公共空間にアナウンスがあふれることとなった。

音声以外のメッセージを伝える音を「サイン音」と呼ぶが、日本の公共空間にはこのサイン音も多い。電車通勤の人は毎日のように駅の発車サイン音を聞いているだろう。鉄道駅や公共的な施設の入口では、「ピンポン」と鳴り響く誘導鈴が設置されている。これは周囲の音の情報に頼って生活している視覚障がい者のために設置されたもの

で、休みなく鳴り響いている。また、火災などが発生すれば、警報音で避難を呼び掛け、北朝鮮からミサイル(と思われるもの)が発射されれば、「Jアラート」が鳴り響く。

3 公共空間を考えるとときにはそこで聞こえる音を意識する

公共空間では、にぎわいが心地よい空間もあれば、「しずけさ」が求められる空間もある。また、雑多な音が鳴り響く公共空間の音環境は誰かにコントロールできるようなものではなく、画一的なデザインは難しい。ただし、公共空間の音環境を少しでも改善するための方策はいくつかある。まずは「音を意識する」姿勢であろう。

公共空間をプランニングあるいはデザインする場合、それに携わる人たちの頭の中には、その完成像が描かれているだろう。ただし、視覚的には明確に描かれていたとしても、そのプランがどんな音環境を伴うのかまでをイメージする人はあまりいない。例えば、新しい地下街ができて、そこでどんな響きが生ずるかといったことである。十分な吸音材が使用されなければ残響の多い空間になり、誘導鈴や店舗のBGMもガンガン響く空間になるだろう。必要とされるアナウンスが明瞭に伝わらなくなるおそれもある。そういった音環境に対する配慮を持つ姿勢が必要とされる。

また、「音質」に対する配慮も忘れてはならない。例えば、目に見える汚れなどに対しては、苦情を訴える人も多い。しかし、そんな人たちでも、スピーカーから出る音に対しては、歪んでいたりノイズが乗っていたりしてもあまり気にならない。音が鳴らなくなって、やっと対処することになる。アナウンスは音質が落ちると明瞭度が下がるので気にする人は多いが、サイン音はその音質の劣化を気にする人は少ない。音の質にも少しは配慮して、コストをかけてもよいのではないだろうか。

4 音を出す側は「聖なる騒音」に対する自覚を持つことも必要

音環境のあり方を考える上で参考になるのが、カナダの作曲家レーモンド・マリー・シェーフアーが提唱した「サウンドスケープ」の思想である。サウンドスケープとは、「音の風景」「音の環境」といったことを意味する。彼はサウンドスケープの思想を通して、環境の中の音を意識することの重要性を説いた。

そして、公共空間において大音量で鳴らしても許される音のことを「聖なる騒音」と称し、権力の象徴と位置づけた。中世のヨーロッパでは、キリスト教の教会の鐘の音は聖なる騒音として、人々に様々なメッセージを伝えていた。祭りの喧騒も聖なる騒音として、その日に限って大騒ぎが許されている。現在の社会では、公的なアナウンスも聖なる騒音になっていると考えられる。

コロナ禍での路上飲み禁止の呼びかけも、「聖なる騒音」だった。その呼びかけを聞いて、「うるさい」と感じた人たちもたくさんいただろう。もちろん呼びかけた側に悪気はない。「コロナ対策」という大義もある。路上飲みを禁ずること、そのことを大声で呼びかけることの実際の効果はさておき、大声パフォーマンスは「コロナ対策に一生懸命取り組んでおります」感を出すには最適な手段であった。実際、多くのテレビ局が「路上飲み禁止の呼びかけ」を取り上げていたように、マスメディアへのアピール効果は十分にあった。

現在、コロナ禍における制限が緩和され、東京都内の飲食店に対する制限はなくなり、「路上飲み禁止」のアナウンスの必要もなくなった。それに代わって、歓楽街では「客引き行為禁止」のアナウンスが戻ってきた。呼びかける側の大義は認めるが、大声で繰り返される呼びかけを「うるさい」と感じる人たちへの配慮もほしいものである。